第3種郵便物認可　2020.7.21(火)　朝日新聞

光と影 バランス良く書くべき

教科書採択2020

育鵬社版採択で中心的役割

今田忠彦 元横浜市教育委員長

横浜市は2009年に18区中8区で自由社の歴史、11、15年に全市一括で育鵬社の歴史・公民と、「新しい歴史教科書をつくる会」系の教科書を選んできた。その中心にいたのが、教育委員を14年務めた今田忠彦氏(76)だ。話を聞いた。

――昨年「横浜市が『つくる会』系を選んだ理由」（産経新聞出版）を出された理由は。

中田宏前市長に教育委員就任を打診されたサプライズ人事が全ての始まりでした。退任した後、巨大な横浜で委員を長年務めた経験を世間に伝えるのは使命だと考えました。

――教育委員会のあり方をどう見ていましたか。

最初の会議の時「ここは議論をする場じゃありません」と誰かが言いました。市立大の学長が委員長、他の委員は医師会、校長会などと枠がありました。

教科書採択の流れも決まっていました。教科書調査員を務める現場の先生の各教科書への評価を、その上の教科書取扱審議会が追認し、さらに上の教育委員会が追認してきた。ですが法律上、教科書を決めるのは教育委員会であり、私はそれを実践したまでです。

いまだ・ただひこ　東北大学卒業後、横浜市職員に。秘書課長、財政部長、総務局長を歴任。2003～17年に横浜市教育委員（うち06～15年は教育委員長）を務め、中学の教科書採択を4度経験した。現在、横浜市立大学理事。

――教科書に対しどんな思いを持っていましたか。

従来の教科書では国や郷土に誇りも愛着も生まれません。戦争で勝った方にも負けた方にも正義はある。光と影をバランス良く書くべきです。家族愛、郷土愛、祖国愛は人間の一番の基礎になる部分です。

――09年の自由社版採択は全国初でした。著書で「中田市長が『適正な人選』をしたことが結果につながった」と書かれています。ご自身は教育委員の人選に関与したのですか。

市長が林さん（文子現市長）になってからはありません。中田さんの時は、聞かれれば。

――11年は林市長就任後初の中学校教科書採択でした。育鵬社版を採択した際は、林市長から「極めて厳しい指摘があった」そうですね。

林さんは市長選で民主党に推薦され、その有力支持団体の横浜市教職員組合から支援を受けたからです。でも半年後には態度がガラッと変わった。ご自身で勉強され、気持ちの変化があったのでしょう。翌年、委員再任を要請されました。

――11年は採択範囲が区ごとでなく全市一括に。横浜市の採択は全国ニュースになりました。

採択後、首相に再指名される前の安倍さんにパーティーでお会いし、「（06年の第1次安倍内閣のもとで）教育基本法を変えて下さったおかげで、教科書採択がやりやすくなりました」とお礼を言いました。教育の目標に「我が国と郷土を愛する態度を養う」と明確に書かれ、それに沿った教科書を選びやすくなったのです。

――著書では黒岩祐治知事が11年当時、「つくる会系の教科書が偏向した内容とは思わない」と述べたことにも触れていますね。

知事室に著書を持参したところ、後日、丁寧な礼状が届きました。

――首長は教育委員の人選を通じ、自らの歴史観を教科書に反映できますね。議会同意を得る必要があるので必ず思い通りの人事ができるというわけではありませんが。

それは、今の仕組みの中ではしょうがないでしょう。他に何か良い方法がありますか。

――教科書に関して、現場の教師の意見を尊重すべきだという声もあります。

一理ありますが、特に歴史や公民の場合、その先生が受けてきた教育がバランスの取れたものかどうか、難しいところです。

――横浜では「最も左側と言われた『日本書籍』の教科書が採択され続けてきた」と著書にあります。その横浜で「つくる会」系を選ぶことができたのはなぜですか。

みんなが何となく思っていたことを引き出す勇気があっただけです。こうだと決めてかかっていたものに違うぞと言い、それに賛同する仲間に恵まれました。

――今夏の採択に期待することは。

思うところはありますが、言わぬが花です。（吉野慶祐）